飛耳長目〈第18 回〉開催概要

日 時	令和6年1月 22 日(月) 午後6時 30 分～午後8時
場 所	安曇野市役所本庁舎 共用会議室 306
テーマ	ワーケーション(テレワーク)による関係人口増加に向けた取り組み
参加者	穂高リゾートワーケーション研究会 15 人

参加者　ワーケーション研究会は働き方改革を通じて関係人口をどのように増やせるかというテーマで、ポータルサイトを構築したり、モニターツアーをおこなったりしている。新しい取り組みであり、試行錯誤の段階で課題が多いと感じている。コロナ禍で在宅勤務が増えたが、コロナが５類に移行したことでコロナ禍前の生活が戻ってきており、今は出社する形に戻りつつあるという報道も目にしている。一方で、大企業では優秀な人材を確保するために基本的にテレワークを続けているところもある。模索している段階だが、行政と真摯に議論し中長期のスパンで政策を展開できればと考えている。先週、テレワークで先進的な取り組みをしている信州蓼科観光協会に視察に行ってきた。コワーキングスペースのコーディネーターが業務にあたっている様子を見て、中核となる人間がいないと推進していくのはなかなか難しいと感じた。元気づくり支援金を活用したポータルサイトが来月には完成するが、実際に問い合わせがあったときにどう対応するかが課題である。
本日は参加者からいろんなアイデアが出てくると思うが、それに対する回答を求めるというよりは、行政と課題を共有しこれから進むべき方向性を探っていければと思う。

参加者　塩尻市では自動運転バスの実証実験が行われている。安曇野市でも関係人口を増やしていくために、テクノロジーの最先端都市として全国で一番に取り組むようなことができないか。交通手段が確保されれば地域の飲食店や宿泊施設にアクセスしやすくなる。今後交通弱者が増えていく中で、サスティナブルな社会を実現するために、技術革新を活かしていく必要がある。現実問題としては難しいかもしれないが、一路線でも自動化に向けて行政主導で取り組んでいってもらえたら嬉しい。

参加者　ワーケーションやテレワークと農業分野がどう関わっていくかが課題。農業従事者がかなり減ってきていて、安曇野市全体でも人口が減少し、子どもが減っている。農業を辞めて出ていく人もいて、空き家が増えている。この空き家をワーケーションという枠組みでうまく活用ができないか。ワーケーションの中で農業をやってみるとか、近年整備された自転車コースがあまり認知されていなくてもったいないので、それを活かした自転車等のアクティビティができたらいいのではと思う。農業関係企業と話す中で「除草剤や農業機械の試験を現場でやっても、その結果を話し合う合宿の場がない」という話があった。古い農家の空き家をうまく利用できればと思う。ワーケーションの中で休みの時にはアクティビティを楽しみ、農業に触れたりしながら、安曇野について知ること

で、移住するということに繋げられるのではないかと考え仲間と相談しながら進めている。進めていく中での一番の課題は、空き家を活かすための予算補助がなかなか無いということ。直近で使えるものが無かったり、宿泊に対する補助しかなかったりする。すぐ動きたいがなかなか動けない。空き家対策も含めて行政の素早い支援があれば嬉しい。

参加者　鎌倉市の会社に勤め、７年前からリモートワークで２拠点生活をしている。ユーザーとして、ワーケーション環境という点での安曇野のポテンシャルの高さを感じている。豊かな自然の中で働けるというのはリフレッシュ効果があるし、仕事の後には温泉や北アルプス雄大なの眺めを楽しめて、多様な生き方ができる環境があることが素晴らしい。東京で働いていたときは飲み屋に行くくらいしかなかった。３年前からコワーキングスペースに取り組んでいる。「安曇野で遊びながら働こう」という形で有志で情報発信をしているが、提供できるワークスペース環境や情報も限りがあった。もっと広いワークスペースも選べるなど、選択できることが必要。安曇野は自然環境が素晴らしいが、残念ながらコワーキングの環境がまだまだ充実していない。そういった環境整備は民間だけでは限界があり、行政側との連携を強化できると良いと考えている。Web サイトを構築することになったのも、安曇野市でワーケーションができるという情報があまり発信されておらず、良い環境ということが認知されていないと感じていたから。我々民間側も情報発信を強化し、市と協力していきたいので、市でも積極的に取り組んでいただきたい。

参加者　松本では閉業するコワーキングスペースもあったりしていて、民間事業者がビジネスとして続けていくにはハードルがあると感じている。松本市はサザンガク、塩尻市はスナバのように、公共施設として整備している所が結構ある。

参加者　コロナ禍で飲食店営業がなかなか立ち行かない中で、飲食をしながら仕事をしてもいいかという問い合わせがあったことから、コワーキングスペースの設定を始めてみた。1 週間に 1 回利用する方もいれば、毎日来る方もいたりするが、飲食店の席をすべて埋めるような数になるわけではない。飲食+コワーキングという形でやっているが、＋αのお金をいただくということもできず、事業を始めて３年になるが、経営の助けになるほどの売り上げにはなっていない。ワーケーションという形で長く滞在する人が増えれば、さまざまなコワーキングスペースを利用する人が増えていくと思うので、行政からも「安曇野に来ればコワーキングスペースがある」と企業に売り出して誘致してほしい。

参加者　全国各地を回っていて行政とやり取りをしているが、どこに行っても言われるのが、人口減少にどう対処していくか、関係人口をどう増加させるかということ。日本全体で人口が減少する状況では、「この地域がどうやったら選ばれるのか」が一番のポイントになると思っている。これまで全国を回り、安曇野に来て 4 年経つが、この景色はやはり素晴らしく、観光の部分では魅力がたくさんある。住む場所としてどうなのかというと、車が無いと生活しにくいのが課題だと思う。経営するホテルではワーケーションで長期

に滞在する利用者が結構いる。館内にラウンジが７つほどあり、そういったところでパソコンを広げて過ごす人が１週間のうちに３～４人はいるので、需要が出てきているのかなと感じている。課題はお客さんがなかなかコワーキングスペースなどの情報を見つけられないこと。例えば市役所や観光協会に問い合わせをした場合に、しっかりと対応ができるのか疑問。今準備しているポータルサイトも含めてまずは対応できる窓口の数を増やすことが一番のポイントだと考える。窓口の数が増えればあとはそれぞれ自助努力をしていくことができるので、その仕掛けができないかと考えている。さらに、窓口に入ってきた人を逃さないためのアイデアとして思っているのが、温泉地にある温泉手形のような、安曇野にあるコワーキングスペースを巡るワーケーション手形を作れたら面白い。そんな形で行政と民間が一緒になって発信できたら。

参加者　シェアハウスを経営しているが、山が好き、山小屋関係者、テレワーク、保育関係、農業に関わりたいという人が多い傾向。今日提案したいのは、せっかく行政の方と話ができるので、行政と民間の協力関係をつくれないかということ。塩尻市のスナバのように、行政が場所を提供し、コミュニティマネージャーやコーディネーターといったつなげる人を設置して、働けて人がつながれる場所というものを１カ所でも作れれば良いなと思う。例えばしゃくなげの湯の広いロビーの一角にコワーキングスペースがあると「温泉付きのコワーキングスペース」という特徴ができるし、安曇野市役所も立派な建物で４階からの眺めもいいので、そういうところにコワーキングスペースを設置してコーディネーターもいる、となると安曇野市らしい独特のコワーキングスペースになって、オープンな空間で仕事ができていいと思う。市内には小さいコワーキングスペースがたくさんあり、それが互いに連携していて、アクティビティもあるという状態が理想的と考えている。

参加者　民間企業向けのモニターツアーを実施し、３泊４日という日程で市内のコワーキングスペースで仕事をし、最終日にアクティビティとしてゴルフを体験してもらった。非常に満足し、仕事+アクティビティの組み合わせがいいという話をして帰っていった。親子ワーケーションに取り組んだ方からも話を聞きたい。

参加者　豊科でコワーキングスペースを運営している。昨年秋に親子ワーケーションを初めて開催したが、長期休暇のタイミングではなかったので、小学生以上のお子さんの参加はなく、全て未就学児との参加だった。インフルエンザが流行ってしまい、直前のキャンセルも多々あって運営の難しさを感じたが、参加者アンケートでの満足度は非常に高かった。今回はワークスペースの中に保育士さんを雇ってみていてもらったが、近くで見れてよかったという声もあった一方で、集中できなかったという声もあった。また、実際に市内の保育園に通ってみたかったという声が多かった。今後はできれば既存の保育園に預けられるようにして、安曇野で保育園に通うイメージに繋げられればと考えている。また、そば打ち体験やリンゴ狩りはとても喜んでもらえたし、移住者交流会という形で移住してきた方々と話をする機会を作ったところ、「学校に行ったら…」といった生の声

が聞けて良かったとの声をたくさんいただいた。実際に地元に住んでいる方々と来た人が交流できる機会を作って良ければと考えている。

参加者　先ほど話があったとおり、モニタリングツアー３泊４日の中でゴルフ場を利用していただいたが、参加者からの評価はよかった。安曇野はゴルフ場だけでなくさまざまな体験ができ、観光資源がある。安曇野のワーケーションに関するポテンシャルの高さを感じているので、これを認知してもらうために何ができるかが課題。ポータルサイトを立ち上げたりしているが、民間だけでは限界を感じている。蓼科のような成功事例を見習って、行政としてどうかかわることができるのか研究を進めてもらい、行政と民間が一体となって進めていく仕組みができればいいのではないか。行政の中では積極的にワーケーションの誘致に取り組んでいる所がある。それらの情報を集めて民間の持つ情報や力と行政の力を併せて、首都圏の企業などに売り込んでいけたらいいのではないか。

参加者　観光は基本的にリピーターがいないと成り立たない。来た人が別の人を誘ってまた来てくれることが大切で、ロコミやメディアへの露出など発信の手法はいろいろあるが、結局こういった今までやってきたことの延長や組み合わせだと考える。安曇野市は農家民泊が盛んで、農家民泊の受け入れができるところがたくさんあるので、それを活かさない手はないと思う。そこにアクティビティがくっつくと安曇野らしいコンテンツができるのではないかと考える。

参加者　25 年間前に移住してきて、観光や川下りのアクティビティにかかわってきた。その中で段々来る人のニーズが変わってきていると感じている。それは「住む所はないか」よく言われるようになったこと。地元の不動産屋さんと連絡を取り合いながら紹介したりするが、なかなかいいところが見つからない。今頼まれている案件はいずれも「北アルプスが見える」ということが求められている。それほど北アルプスのロケーションは魅力があるもの。ただ空家の情報発信がなかなか無いし、自分たちも不動産屋ではないので、情報が集められない。だから自分のようなアクティビティの業者と不動産業の方、飲食業の方など異種業種間の連携がとれれば思う。また、自分自身も旅をする中で訪問先を好きになることがあるが、その街が好きになる瞬間というのは、景色だけでなくそこにいる人が好きになった瞬間である。さきほどから話の出ているポータルサイトだけでなく、アクティビティをやっている人間をうまく活用して、「ここにコワーキングスペースがあるよ」「移住の紹介もできるから仕事しに来たらどう？」など、人づてに来てくれた人に発信することも大切。これまでに何人か「仕事をしたい」という相談も受けたりしていたので、このワーキング研究会を機にコワーキングスペースを紹介して繋げられればと思う。ポータルサイトで広く発信するだけでなく、皆さんと連携しながら一人の心をつかむようなことができたらと思っている。ひとつ、行政にお願いがある。仕事の中で撮影する子どもたちの写真や川や空などの自然を写した写真がたくさんあり、観光協会さんや市役所から依頼があると写真を無料で提供しているが、少しでも購入してもらえれば小さな個人事業者としては生計をたてられて助かるので検討してほしい。

参加者　スポーツカーの貸し出しをするお店を最近オープンした。安曇野はビーナスラインも近くて観光地としての魅力がある。利用者の満足度も高く、お客さんから「こんなところに引っ越せたら」という話を聞くので、「まずは短期間で、コワーキングスペースで仕事もできますよ」といった情報を発信できればと思っている。

参加者　最近別荘を購入された方に話を聞いたが、穂高神社の神竹灯で竹に灯をつける体験をし、「この地域は素晴らしい」となって大阪から移住したとのこと。昔に比べイベントが減っているが、やはりイベントを通じて地域への理解を深めるという体験は非常に重要である。ただ、現状ではそれぞれの事業者が人手不足や後継者不足に悩んでおり、良いイベントを構築することが難しい。やるとしてもある程度外部委託をせざるをえない。そういった、広範囲に活用できるイベント関係の助成制度があると地域や民間独自のイベントができるのではないか。また若い世代の方は広い人脈を持っていろんなところから人を呼んでくるが、ある一定の層にしかお互いに届いていないということもあるので、イベントを通じて若い人同士をつなげるためにも、助成というものを考えていただきたい。また、三菱地所にうかがい安曇野でのワーケーションの取り組みについて話をしてきた。そのなかで、宿泊とコワーキングスペース、体験アクティビティを組み合わせるというのは今までにない独自の取り組みで面白いと言ってもらえたが、一方で安曇野は首都圏からの距離がネックになるとの話もあった。そうすると、松本空港を活かし、福岡市や神戸市などから利用者を呼ぶというのがいいのではないか。福岡市東区は友好都市でもあり、市全体で交流を促進し連携していけたらいいという話が出た。

市　長　私自身としては今から５年前の副知事時代に和歌山県で行われたワーケーションのキックオフに立ち会った。市長になり安曇野でもやればいいと思っていたところ、すでにテレワークをやっているというので良かったと思っていたら、実態は主に主婦の方が自宅ではなく通信環境の良い場所に集まって仕事を請け負い、インプット作業をするということしかやっていないとわかり、もっと別の取り組みも検討するよう庁内で話をしていた。まだまだやるべきことがたくさんある。皆さんの話は本当に参考になる話ばかりだった。特に気になった点に触れていくと、安曇野市は令和４年の段階で社会増が 497 人で、長野県内ではトップクラスに多く、自然減があるので全体としては少し減っているが健闘している。シェアハウス滞在者からの移住相談は結構いただいているので、そういった方々に実際に移住してもらえるようしたい。空き家対策にも力を入れていて、例えば明科の龍門渕てらすのように空き家を使ってワーキングスペースやちょっとした食堂もやって、という使い方ができるところは結構ある。ただ、そういった情報の一元化ができていないと思っている。また、体験保育の話があったが、安曇野市立認定こども園は全て特化型か普及型のいずれかで自然保育に取り組んでいて、特に特化型の明科北保育園は民間に運営を委託し、ほとんどの時間を外で過ごす、といったこともできるようになっている。加えて全ての園で芝生化を進めていて、裸足のまま走り回れるように環境整備を進めている。地域おこし協力隊による取り組みとして園庭の中に田んぼを作

り、苗づくりから収獲まで体験し、どうやってお米が育つかを知ってもらうといった取り組みもしている。こういった取り組みを聞いて外からの問い合わせも来ており、移住交流に結びつくような要素がいくつかあるので、もっと体系化して提供できれば。また、最初に出た自動運転についてだが、現在デマンド交通・あづみんを土日も運行できるように検討しているが、その場合 2024 年問題と言われているように時間外労働の規制が始まることから委託先のタクシー会社から運転手が足りないと言われている。その対策として自動運転は考えるべきである。モニタリングツアーはいい取り組み。安曇野市でも三郷小倉にお試し住宅を用意しているが、北アルプスは見えない立地になっている。

課　長　「りんごがなっているところを初めて見た」「駅からお試し住宅に向かう途中で北アルプスが見えてとても良かった」といった声をいただいている。

参加者　お試し住宅の利用率はどのくらいか。

市　長　無料で提供しているため利用率はかなり高いが、そのあと実際に移住してくれるかは測れていない。行政の役割をもっとしっかりさせないといけない。皆さんがこれだけ頑張っているので、行政も本気になって安曇野でのワーケーションを促進するキャンペーンをやらなければいけない。皆さんの取り組みにプラスし、行政こその発信ツールを活かして情報発信をしていきたい。また副業としてこういった取り組みに参加しているというお話があったが、これから半農半Ｘ（エックス）をもっと促進したいと思っている。規制を緩和し、未経験者でも農地付きの空き家を取得できるようになったので、安曇野で農家をしながら＋αで暮らす、そういった取り組みをぜひやりたい。大らかな気持ちで緩やかな連帯を大切にすることが大切だと思っている。ワーケーション研究会が中心となり、不動産の方とかいろんな職種の人を仲間に引き込んで繋がりを作ってもらえればうれしい。いくらでも手伝う。

参加者　不動産業に長年関わる中で驚いているのが、県内いわば地元の人からの安曇野の人気の高さ。業務量としては県外の方へのアプローチの方が圧倒的に多いが、実際の契約になった物件の約 70%が県内の方によるもの。地元（同じ県内）の人に愛される別荘地というのはなかなかないので、なぜ人気があるのかを紐解き、PR に活用し、県外の人にも安心して移住してきてもらえると発信していきたい。

市　長　首都圏との距離という話もあったが、東京駅から新幹線と特急しなのを使えば、約２時間で明科に着く。その明科地域は過疎地に指定されたが、特急が停まる駅もスーパーもあって、これから安曇野北インターもできる。土地は安く、明科北保育園では自然保育の特化型を受けられる。明北小学校は市内のどの地域からも通えるように制度を変えており、今後過疎債を使ってアウトドアの拠点を整備するといったことも考えている。一つ残念なのは、冬季期間は長峰山山頂への道が封鎖されてしまうこと。何とかしたいと考えている。地盤が弱くて簡単には工事ができない。

参加者　雲海や雪をかぶった北アルプスの眺めが楽しめる時期に車で上がれなくなってしまうのはもったいない。月に１回は首都圏と往復するが、距離はあまり感じない。

市　長　皆さんと一緒にワーケーションの誘致に取り組みたい。いろんな業種の方を増やすことで対応できる幅が広がるので、広めてもらえれば。

参加者　まだまだ足りないところもあるが、極端に大きくしてもコントロールができなくなってしまうので緩やかに進めていきたい。

市　長　共生社会の取り組みや猿の追い払い隊など、過去１年くらいで褒められている政策は市職員からの提案が多い。市役所もいい方向に向かって行っているので、いろいろ意見を出してもらえれば考えて行けると思う。しっかりまとめてやれることから対応したい。特に実際に住む前の段階でシェアハウスに住む方が相当いるので、移住交流に繋げたい。

参加者　これからまだまだ非常に大きな課題があるということを共有できた。それぞれ関係部局と話し合いをさせていただく中でよりよい方向に持っていきたい。